

菅野圭介 《哲学の橋（ハイデルベルク）》

二〇一〇年から二〇一一年にかけての「菅野圭介展―色彩は夢を見よ―」の四館巡回展によって、梅野隆さんの菅野顕彰の宿願が成就した。横須賀美術館のみならず、その後の一宮（三岸節子記念美術館）にも、四国の松山（ミウラト・ヴィレッジ・三浦美術館）にも梅野さんは足を運んだ。その疲れからか、肝心の梅野記念絵画館でのオープンの前々日に骨折入院。閉幕の前々日に退院、展覧会を見ていただくことはできなかったが、程なく今度は脑梗塞で入院。闘病叶わず帰らぬ人となった。その菅野展のポスターに使われたのは、《哲学の橋（ハイデルベルク）》、《蔵王雪山》、《白都リオ》の三点。中から一点となるとやはり《哲学の橋》であろう。一九五三年、菅野全盛期の作であり、一九九五年に平塚市美術館で開催された「匂いたつ色彩の詩―菅野圭介展―」でもポスターに使われた逸品である。

佐藤修（長野県東御市）

菅野圭介 《哲学の橋（ハイデルベルク）》
油彩・キャンバス 60.4 × 72.6cm 1953年 梅野コレクション



菅野圭介（すがの・けいすけ／1909-1963年）
東京生れ。京都帝国大学文学部中退。1935～37年欧州巡遊。フランドランに師事。38年独立美術協会賞。41年日動画廊で個展。43年独立美術協会会員。52年渡米、ブラジルを経て欧州へ、同年帰国。東京で没。53歳。

中村忠二《夜の沼》

私のいた会社では、役員になる場合、一旦従業員身分が解かれた。つまり退職である。よって退職金が出る。私も五六歳で戴いた。その時、絶妙のタイミングで中村忠二の《花と虫とヒロコ》（昭和五一年東京新聞出版局刊）の全原画を買わないか、との話が持ち込まれた。全くとまたまのことだが金はある。かくして私の忠二コレクションが始まった。

中村忠二の魅力を教えてくれたのはもちろん梅野隆さんだ。その梅野さんの推奨の逸品がこれ《夜の沼》。

佐藤修（長野県東御市）

中村忠二《夜の沼》

モノタイプ・紙 26.0 × 60.0cm 1967年 梅野コレクション／梅野記念絵画館寄託



中村忠二（なかむら・ちゅうじ／1898-1975年）
兵庫県生れ。1918年上京。日本美術学校入学。
28年詩集『願望』を出版。白日会展、光風会
展、国画会展に入選。36年文展鑑査展に入選。
51年日本水彩連盟会員。58年よりモノタイプ
で虫や花の作品を制作。75年没。77歳。

竹久夢二《一座の花形》

それは秋の陽光の眩しいある骨董市での話であった。

向こう側の一劃の主人が私に手を振ってこちらに来说いと言う。何事かと近づくと、彼は鞆から一枚の絵を取り出して「今日貴方が来ると思ってた取っておいた……」と見せられたのがこの《一座の花形》であった。言うまでもなく大正初期の夢二版画の代表作である。私は思わず息を呑む思いでしばし見入った。

夢二は大正三年、日本橋のそばの呉服町で、別れた妻のたまきのため港屋という店を開き、版画・封筒等を扱った。後の恋人彦乃もその店によく通って来たという。今手にしている版画は右下に港屋と記されており、その時のものである。しかし二年後には店は閉じられ、港屋の版画の版木等は一括して大阪の柳屋に売却されたという。だが小生に限る限り、今までのこの版画の「柳屋版」を見たことがない。速断は出来ないが、この版画については初刷りに該当する港屋版しか実在しないのではないか……と想ったり、そしてどなたかこの辺の事を教えて頂けたらと願ったりする。

岩本昭（東京都世田谷区）

竹久夢二《一座の花形》
木版画・紙 20.3 × 18.1cm 1914年



竹久夢二（たけひさ・ゆめじ／1884-1934年）
岡山県生れ。早稲田実業学校卒。新聞雑誌のコマ
絵、装幀、挿画、図案も手掛けた。1909年画集『夢
二画集 春の巻』を刊行。12年夢二作品展覧会
開催。美人画が一世を風靡する。31年渡米、渡欧。
信州で没。49歳。各地に夢二美術館がある。

中村正義 《建築中の家》

この作品は一九五七年の四月九日から一四日まで、日本橋高島屋で開催された高山辰雄主宰の第一六回一采社展に出品された作品である。正義は一九五二年の暮れに再発した肺結核の病状が悪化し、その後四年の間に二度にわたる胸郭整形手術の末に、左右八本の肋骨を失いながら病を克服して、この年、一采社（四月）に《建築中の家》を、日展（十一月）に《赤い舞妓》を出品、四年振りに画壇復活を果たしたのである。しかし展覧会出品の《建築中の家》の諸評は冷やかなものであった。

この作品との出会いは二〇〇六年六月のある日、日本橋にあった某画廊を訪れた折に、画廊の主人に中村正義の風景画があるが見てみないかと誘われたのが直接のキッカケであった。当初正義の風景画と聞いて日展時代のセピア色の林や山の風景が頭に浮かび気乗り薄であったが、主人がそんなものではないよと言って出されたのが、風景画では異色ともいえるこの《建築中の家》であった。

仔細に絵を見ているうちに私の心の内底から感動が湧きあがるのが感じられた。木の香が匂うような木組みと、さわやかな風の流れが眼前にあった。またそこには明日への期待も重ねられているかにも見えた。購入を約しての帰り途、足は軽やかで一日の疲れも吹き飛んでいた。後で判ったことであるが、あや夫人が正義と出会い結婚して、名古屋に新居を構えた新婚時代の絵で、正義が遺族に託したこの作品への遺言を果たすべく、美術館主催の展覧会図録でも連絡協力を呼び掛けるなど、五〇年も探し続けていた作品であった。

丸山治郎（東京都中野区）

中村正義 《建築中の家》

岩彩・和紙 39.3 × 102.5cm 1957年



中村正義（なかむら・まさよし／1924-1977年）
豊橋市生れ。戦後の荒廃した日展に彗星のように登場し、一度の落選もなく出品回数10回で特選2回、遂に審査員に上り詰め、若輩で日展会員となる。日展を離脱。日本画改革の先頭に立ち、因習と戦い憤死する。52歳。

星野真吾 《昇（鳥の子紙による作品）》

この絵はブラリと立ち寄った湯島の羽黒洞で求めた。その日は羽黒洞では在庫整理を行っていた。店主の木村東介氏の隣に座って眺めていると、番頭さんが次々に倉庫から取り出してきた作品を、東介氏が一瞥して右・左と、指示を出していた。そこへこの作品が運び込まれてきたのである。私は咄嗟にこの絵は誰の作ですかと東介氏に尋ね、欲しいというと左によけてくれた。全体の渋い佇まいと、円（太陽）の在りよう、作風が気に入った。絵の画面の下部には鳥の子紙が貼りつけてあった。上部の朱の下地から浮かぶ円形は太陽とコロナであろう。下部の鳥の子紙が、波にも、すすきにも、虫たちが遊ぶ草原にも見えた。そこに壮大なロマンがあった。

しばらく経って、額装を変えてもらいに羽黒洞に伺ったところ、作者の星野真吾氏が偶然に見えていて、これ幸いと購入後にこの絵について気になっていることのいくつかをお尋ねしてみた。無かった画題もその時にシールに記していただいた。それとライティングによって絵の表面が輝いて見え、不思議に思っていることをお話しすると、従来の日本画における箔の利用の仕方を変えるべく模索と実験を繰り返していた当時の実験的な作品で、下地に箔を使用しているとのことであった。「心象円」のシリーズが終わって「人拓」に入る直前の作品と判った。その時に「人拓」のシリーズ作品に新たに取り組む経緯をお聞きしたのも懐かしい思い出である。

丸山治郎（東京都中野区）

星野真吾 《昇（鳥の子紙による作品）》

着彩、箔・紙 53.0 × 33.3cm 1966年



星野真吾（ほしの・しんご／1923-1997年）

豊川市生れ。日本画家。中村正義と中学時代に出会い生涯の盟友となる。卓抜した技法の持ち主で、その質感と対象への肉薄は他の追随を許さない。三上誠とパブリック美術協会を興し絵画の革新を目指す。星野真吾賞創設。1997年没。74歳。

山下菊二《両鳥》

画題の《両鳥》とは何を意味しているのであろうか。眼がいくつも描かれている。前面の下部の手に持っている物はなんだろう。その中にも二つの目を持つ生物がいる。画面に複数の鳥が描かれているのは事実のようにある。題名はそこから来ているのであろうか。下部の手は豊満な乳房の女性の手ではない。背後にいる何者かの手である。豊満な乳房の女性の頭部は鳥か。その女性の腹部は朱で大きく孕んでいる。とすると背後の人が手に持っているのは、子宮と胎児か。その後ろの暗部に潜む鋭い目をもつ半顔は男性のようである。心象をシュールの技法で表現する山下の絵の、画面の細部を検証するのは容易でない。

山下は鳥好きであった。奥さんを迎える条件にも鳥好きで女性と、わざわざ指定していた。晩年自宅には複数のフクロウを放し飼いにし可愛がっていたが、そのフクロウを家に持ち込んだのは、奥様の昌子夫人と聞いている。

この絵と出会ったとき、バックの暗い色調から浮かぶ華やかな色彩と、肉感を前面に出した画面に、私は静謐と、ぬくもりと、柔和さを感じとっていて、同時に山下の身辺と、その希求、その心の中を垣間見た思いも重なっていた。小品であるが素晴らしい出来栄えの作品で、わたしには愛着のある作品である。

この絵の制作年の一九七七年には盟友であった中村正義が亡くなった。それも重なるのか（この作品は正義没後の「第六回雷展」ギャラリーヤエス、一九七七年七月四日―一六日出品作）。

山下の画題の難解さには理由がある。それは中村正義と共に買い揃えた『大漢和辞典』大修館書店刊、全一五巻（当時は二三巻）を利用した二人の漢字遊びに起因している。

丸山治郎（東京都中野区）

山下菊二《両鳥》

油彩・キャンパス 33.4 × 24.3cm 1977年



山下菊二（やました・きくじ／1919-1986年）徳島県生れ。洋画家。上京、福澤一郎の絵画に惹かれ本郷動坂の福澤絵画研究所に入所、美術文化協会に移る。召集で中国戦線に派兵。その記憶が心に深く刻まれる。加害者として反戦に拘った。1986年没。67歳。

御園 繁 《伝副島種臣像》

不詳画家の唯一確認された肉筆肖像画

肖像画の素晴らしさに思わず釘付けとなり見逃すことが出来なかった。私にとって「御園繁」の名前は初見であるが、これだけの技術を持った画家であれば必ずや調査段階で突き止められるもの思いがわいてきた。絵の状況から明治中頃あたりと大よその見当をつけて当時の資料を調べる事にした。案の定、資料を調べると直ぐに五姓田一門に関する項に該当名があり、明治一四年の第二回内国勸業博覧会に《清楽合奏団図》を出品し褒賞を受けていた。他にも共進会や明治美術会員として勸業博覧会などに出品していた事実も判明した。また、タイミングよく神奈川県立歴史博物館で開催中の「五姓田のすべて」展に二世五姓田芳柳による《御園繁像》（東京藝術大学蔵）が展示されており、他にも石版画を御園他が担当した《忠臣義士》も展示されるなど略歴が明らかになってきた。しかしながら未だに生没年など不明な点は残る。

肖像画は入手時、《伝副島種臣像》ということで購入求めた。副島種臣と仮定すると、政治家（一八二八年〜一九〇五年）、佐賀藩出身、外務卿とある。副島は七七歳で没しており、晩年の写真や手元の肖像画から推測して、仮に五〇歳とすると一八七八年（明治一年）頃の制作ではないかと一人思いを馳せている。因みに肖像画は正面からではなく斜め四五度程度の方向を向いた姿勢で、対象に陰影を持たせ見る側に奥行きを感じさせる構図であり、かつ、副島の凛とした内面を描こうと試みた節がある。

一方、私の拙い調査でも、国公立、私立の美術館、博物館などで御園繁の肉筆画を所蔵している先は見当たらない。現在確認できる肉筆画は唯一手元の肖像画一点のみである。

佐々木征（千葉県船橋市）

御園 繁 《伝副島種臣像》
油彩・キャンパス 81.7 × 63.7cm 1878 年頃



御園 繁（みその・しげる／生没年不詳）

1877年頃、石版画の制作を始める。79年渡辺文三郎らと旅行。明治美術会員。81年第2回内国勸業博覧会で褒賞。87年東京府主催工芸品共進会に出品。90年第3回内国勸業博覧会に出品。陸軍助教。1903年振武学校図画教員。

■ 須田輝洲 《静物（枇杷とキャベツ）》

山岡孫吉も収集した幻の画家の手になる静物画

須田国太郎作とある一枚の静物画にただならぬ興奮を覚えた。須田ファンであれば、一目瞭然に須田の作品ではないことが分かる画風である。それでも念のため関連資料で画風やサインなど特徴をチェックしたが、共通点はどこにも見つけられなかった。

私には過去に須田某作品との出会いがあったが、その絵は私の前を疾風のごとく通過していった。それこそが須田輝洲作品との最初の出合いである。そのときに画風についてすっかり記憶したことが、今回の出会いに役立った。私の極めは、作風、サイン、古さなどから判断して間違いなく輝洲の作品であるとの結論に達した。輝洲については、生没年など不明な点が多く、正に幻の画家と言っても過言ではない。作品の主な收藏先は、私の知る限り山岡コレクション、徳川記念財団のみである。

私は輝洲に関して、二つの点に注目している。一つ目は、山岡孫吉が何故に輝洲作品を収集対象にしたのか？ 二つ目は、「明治美術会第五回展の時に輝洲の絵が、何故他の有名な画家を差し置いて林忠正出品のシスレーやクールベ、コロロ、ブーダンなどと同じ会場に飾られていたのか？ 何れにせよ謎が深まるばかりである。

ところで作品について、仔細に観察するとその描写力は胡瓜を例にとっても、とげや花柄を取りたてと見紛うばかりに描き切りその技量は秀逸である。また、陰影の表現も全体に自然で静謐感の演出に効果を発揮しているようだ。さらに画面全体の配色のトーンも枇杷の実と胡瓜、さらにはキャベツの色の組み合わせが絶妙である。余談であるが石川寅治の太平洋画会第五回出品作《静物（びわ）》などと比較しても遜色がない傑作と思っている。

佐々木征（千葉県船橋市）

須田輝洲 《静物（枇杷とキャベツ）》
油彩・キャンバス 35.0 × 46.0cm 1898年頃



須田輝洲（すだ・きしゅう／生没年不詳）

1893年明治美術会第5回展に出品。97年入場料有料で「百美人油絵展」を丹羽林平と開催（東両国江東館）。98年明治美術会創立十周年記念展に出品。作品所蔵先：山岡コレクション、徳川記念財団。師、生没年不詳。

■ 山本森之助 《中禪寺湖の暮雪》

現場制作主義を貫いた画家の目線

きっかけは、平成八年にブリヂストン美術館で開催された「白馬会 明治洋画の新風」展で山本森之助作品を見る機会に恵まれたことである。その時展示されていたのは、『首里の夕月』と『落葉』の二点である。とくに『首里の夕月』は生理的に強く迫ってきて、忘れられない作品である。私はその場で、いつの日か機会があれば森之助の作品を手元において楽しんでみたいとの思いを強くした。しかし、その日は中々巡って来ないまま一〇年以上も経過してしまった。

遅ればせながら私にも待ち焦がれた機会が訪れようとしていた。突然、目の前に作者不詳ながら森之助作と思われる作品が現れた。私は即座に色使いと現場制作主義の臨場感を動物的な感覚で感じ取り、この雰囲気は森之助独特のものであると確信した。急ぎ手元の資料を調査したところ、幾多の紆余曲折を経て、遂に大正六年の第五回光風会展出品作七点の中の一点、『湖畔の夕』と同じ時期に描かれたと思われる『中禪寺湖の暮雪』であることを突き止めた。資料によるとこの年、森之助は日光中禪寺湖に写生旅行をしており、中禪寺湖対岸の松ヶ崎が大日崎周辺から男体山を描いたと推測した。

ところで肝心の絵の構図は、近景中央から左寄りに大きな二本の樹木や船乗り場を配置し、その奥に山を大きく描き、湖面には同じ大きさの山の影が映っている。対岸に点在する人家に灯りが点り始め、微かに湖面に映っている夕景を見事に描写した傑作である。とくにこの絵の特徴は、近景に大きな樹木を配置し、その奥に広がる風景という構図である。資料によると、森之助はこの種の構図を好んで描いていたようだ。私は画家が鑑賞者に強いインパクトを与える為に、意図して描いた逸品と受け止めている。

佐々木征（千葉県船橋市）

山本森之助 《中禪寺湖の暮雪》
油彩・キャンバス 61.0 × 80.3cm 1917年頃



山本森之助（やまもと・もりのすけ／1877-1928年）
長崎市生れ。東京美術学校西洋画選科卒。白馬会賞。白馬会員。第1回から第3回までの文展で連続して三等賞、三等賞、二等賞を受賞。文展審査員。1912年中沢弘光らと光風会を設立した。渡欧。東京で没。51歳。

■ 水木伸一 《狎》

動物画の名手が描いたチン（犬）

画家の愛情が投影されたチン（犬）の絵に心が動いた。見たところ頭が幅広くて丸く、鼻が短くしゃくれて目は大きい特徴を卓抜した描写力でとらえた逸品である。作者は「伸一郎」となっているが、画面を確認すると私には「伸一写」と読めた。咄嗟に私の記憶の中に一人の画家の名前（水木伸一）が浮かんだ。しかしながら水木作品については、今までに何度か目にする機会があったものの、全て水彩画であった。目の前の犬の絵は油彩画であり、残念ながら画風の確認は難しい。一方で作者が誰であれ、この絵は少なくともレベルの高い者が描いたと私には思われた。まずは購入して調べてみる価値があると判断した。

調査を開始すると、伸一はサインを数種類書き分けていた事実が判明した。さらに調査を進めると江津市の今井美術館で、平成八年に「水木伸一の世界」展が開催されていた。早速に美術館に照会すると、学芸員氏から個人的見解の条件付きではあったが、私同様に水木の作品であろうとのことであった。引き続き「遺族などの関係者への確認を依頼したところ、しばらくして届いた関係者の極めも水木の作品に間違いのないと内容であった。その後の調査で大正八年第六回日本美術院展出品目録洋画の部に「狎 水木伸一」の名前を見つけた。当初は「狎」の読み方も分からないままに、とくに気にも留めずに放置しておいた。ところが念のため「狎」の読み方を調べたところ「チン」と読むことが分かり驚いた。もしかしたら手元の「チン」が同展への出品作の可能性が出てきたからである。目録には絵のサインや写真掲載がないので同一作品と断定する術はないが、私自身は出品作品と確信している。

佐々木征（千葉県船橋市）

水木伸一 《狎》

油彩・キャンバス 40.6 × 53.0cm 1919年頃



水木伸一（みずき・しんいち／1892-1988年）
愛媛県生まれ。太平洋画会研究所に学ぶ。1914～15年第1回～2回二科会展に入選。15～20年院展洋画部に出品。第3回院展で奨励賞。渡欧。21年第9回光風会展で今村奨励賞。日本水彩画会会員。88年没。96歳。

■ 小川千甕 《岩倉村》

「この作品ならいつでも寄託をうけますよ」

コレクターにとって最大の褒め言葉です。しかも浅井忠の研究の第一人者からお声掛けいただくことは過分に御世辞が含まれているにせよ、嬉しいものです。また蒐集にはずみがつくというものです。

「明治一五年京都に生まれた小川千甕は、明治三七年浅井忠が中心となって設立された聖護院洋画研究所に入所し、安井曾太郎、梅原龍三郎などと交流を深めた。明治四三年東京に移住する。大正二年ヨーロッパの美術を実見するために約一〇か月間の留学をし、フランス、イギリス、ドイツ、オランダ、ベルギー、イタリアなどを訪れている。柚木久太、満谷国四郎、山本鼎、小杉未醒、藤田嗣治、安井曾太郎と交流した。ヨーロッパで実物の素晴らしさに感銘を受けながらも日本美術への尊敬の念を強く抱いて帰国後、日本画家への道を歩むようになる。

大正五年当時挿絵を描いていた、川端龍子、平福百穂、小川芋銭、森田恒友などと「珊瑚会」を結成。大正一〇年より院展に出品し、昭和七年院展を離脱し、日本南画院に参加して南画を志向するようになる。戦後は団体に属することなく、文人画的な南画を発表した。晩年も九〇歳(享年)で亡くなるまで絵を描き続けた」。 (前川公秀「浅井忠とその弟子たち」特集・小川千甕) パンフレット、佐倉市立美術館より抜粋)

二〇一一年九月三日から九月二三日まで開催されたその展覧会の折に、この絵を同館の前川公秀館長に見ていただくことが出来ました。一〇〇年前のデッサンですが、真剣な眼差しの向こうに鬼気迫るものを感じます。

野原 宏 (埼玉県久喜市)

小川千甕 《岩倉村》

鉛筆・紙 32.0 × 48.0cm 1905年頃



小川千甕 (おがわ・せんよう / 1882-1971年)
京都生れ。北村敬重の弟子。仏画、日本画を学ぶ。
1904年聖護院洋画研究所に入門。06年関西美術院で浅井忠に師事。13年渡欧。15年珊瑚会を結成。油絵から日本画へ。21年院展に出品。
53年日展に出品。71年没。89歳。

■ 森田恒友 《風景》

豊かなエゴ生活風景

明治末の漁村の日常生活を写し取った絵です。なんともおもしろく微笑ましい生活ぶりです。

工業製品の力を借りることなく、生活ができることを示しています。たった一〇〇年前のことです。人間のたくましさや豊かな心は今も失われてはいないと思いますが、なんでも便利になった現在がこのままでよいかどうか。

自然と人間の関係を考えさせる絵です。

自然の猛威から身を守る大きな堤防のそばで日々の生活が営まれている様子は我々に生きる原点を教えてくれます。家族の絆ということが東日本大震災後、急にとり沙汰されていますが、日常の生活の中から自然にはぐくまれるものが、本物の強い絆です。便利で、ものの有り余る現在ではなかなか絆は芽生えそうにもありません。

野原宏（埼玉県久喜市）

森田恒友 《風景》

油彩・キャンバス 21.0 × 54.0cm 1912年



森田恒友（もりた・つねとも／1881-1933年）
埼玉県生れ。不同舎に通う。1906年東京美術
学校西洋画科卒。美術文藝雑誌『方寸』創刊。「パ
ンの会」結成。14年渡欧。15年二科会会員。
22年春陽会創立会員。29年帝国美術大学主任
教授。33年没。51歳。

■ 板倉 鼎 《黒いシヨールの女》

夭折の兄が残してくれたもの

この絵の発見者・堀良慶氏は、「板倉鼎の作品を求めて十数年、この絵と神保町の画廊で出会ったとえようもなく嬉しく、私にも美の神が宿ったときでありました」と語っています。その後、板倉鼎の妹の弘子さんに会われた折に、お兄さんの画業顕彰には画集を作ることが一番有効なことを説き、二〇〇四年に『板倉鼎その芸術と生涯』が刊行されました。一枚の絵の発見から、二度と故郷の地を踏むことなく、若くしてフランスで死去した素晴らしい画家の画集が完成しました。このことが契機となり、地元松戸市はもとより千葉県内外に広く知られるようになりました。

慧眼をもったコレクター・堀良慶氏のおかげで、実力のある画家の業績に光があたりました。

野原宏（埼玉県久喜市）

板倉 鼎 《黒いシヨールの女》
油彩・キャンパス 27.3 × 27.3cm 1924年



板倉 鼎（いたくら・かなえ／1901-1929年）
松戸市育ち。堀江正章の教えを受ける。東京美術学校西洋画科に入学。岡田三郎助と田邊至に師事。帝展に入選。渡仏。サロン・ドートンヌに入選。パリで没。28歳。

■ 田中 保 《静物》

生涯二度と故郷の土を踏まなかつた画家

田中保は埼玉県岩槻（現在のさいたま市）に生まれ、一八歳で単身アメリカに渡り働きながら絵の勉強をして一九二〇年パリに渡りフランスの画家として認められ、一度も帰国することなく、アメリカ、フランスで官能的な裸婦像によって称賛を浴びました。

この絵はフランスで見つけられたものです。黒い大根が主題に描かれていますので、珍しい静物の良品にもかかわらず、長らく画廊の壁に張り付いたままでした。私をよく知っている、目利きのK氏の仲介で生まれ故郷の埼玉にきたものです。

黒い大根は日本ではほとんど見かけられることはありませんが、ヨーロッパでは栽培されています。右側の丸いものは何だかわかりませんが、ほかの絵の中にも描かれています。陶器のツボであることが解りました。

見たこともないものが描かれている絵が掛かっていると目はひきますが、質問も多く返答が大変です。この絵の黒い大根のように見たこともない、珍しいものの話題から話が弾むこともあります。

この絵などは話題提供という面で、野菜の品種改良を仕事にしている私にはずいぶん役に立っています。

野原宏（埼玉県久喜市）

田中 保 《静物》

油彩・ボード 46.0 × 33.0cm 1925年頃



田中 保（たなか・やすし／1886-1941年）
埼玉県生れ。1904年渡米。シアトルのフォック・タダマの画塾で学ぶ。個展で発表。20～41年渡仏。パリでエコール・ド・パリの画家と交友。29年ソシエテ・ナショナル・デ・ボザール会員。「裸婦のタナカ」と称される。41年没。54歳。

■ 齋藤与里 《少女像》

里帰りした絵 画家が愛娘を描いた、とっておきの絵

この絵は京都の星野画廊から、埼玉の野原さんのところへ里帰りするのがふさわしいと譲っていただいたものです。

星野さんによればモデルは齋藤与里の長女京子さんです。「齋藤与里とその時代」展（埼玉県立近代美術館、一九九〇年）の資料には同じような図柄の絵が第六回槐樹社展出品作として写真掲載されています。大正三年生まれの京子さん一五歳の肖像です。京子さんの親友が大切に所持していたもので、高齢になりどなたか大切にしていただけの方にお譲りしたいと星野画廊に持ち込まれたものとのことでした。

その後この絵は槐樹社展出品作に齋藤与里が加筆したものであることが判明しました。

同時代に家族の食事風景を描いた絵にも京子さんは、この赤いネクタイで登場しています。

私はこの絵を見るたびにマチスが愛娘を描いた大原美術館の名作を思い出します。そしてその画面から醸し出される香りと同じものをこの絵からも感じます。

野原宏（埼玉県久喜市）

齋藤与里 《少女像》

油彩・キャンパス 60.0 × 45.0cm 1929年



齋藤与里（さいとう・より／1885-1959年）
埼玉県生れ。聖護院洋画研究所に学ぶ。1906
～08年渡仏。帰国後、後期印象派を紹介。12
年フェウザン会結成。文展で特選。第8回帝展
で特選。春陽会会員。槐樹社創立会員。東光会
創立会員。帝展、日展の審査員。59年没。73歳。

■ 真田久吉 《静物》

「フェウザン会」

大正二年第二回フェウザン会展での出品作です。銀座読売新聞の会場で七円五〇銭の値札がつけられていました。堀良慶氏旧蔵のこの絵について故梅野隆氏が藝林六九号紙上で言及されています。

「堀さんの真田久吉の絵を見て驚いた。

まさか真田の絵を私以外の人が蒐めていようとは……

私は他人が殆ど蒐めていない知られざる画家の名品（迷品）を持つことを誇りとし、自ら良しとする者ですが、堀さんが蒐められたという事実には軽いジェラシーを覚え堀さんの慧眼に敬意を表するものです。

真田久吉は東京美術学校を首席で卒業している。高村光太郎が真田がフェウザン会に参加したことを（今回東京美術学校を首席で卒業した真田君が参加して花を添えてくれた）と書いているのを読んだことがある。佳品です」。

そのまま引用させていただきました。描かれてから一〇〇年になります。

横山俊樹（神奈川県横浜市）

真田久吉 《静物》

油彩・板 33.4 × 24.3cm 1913年



真田久吉（さなだ・ひさきち／1884年-不詳）

東京生れ。白馬会に学ぶ。1909年、東京美術学校卒。12年、フェウザン会設立に参加、第1、第2回展に出品。16年、斎藤与里、萬鉄五郎らと日本美術協会を設立。26年春陽会会友。

■ 中沢弘光 《富士山》

日本の原風景

山中湖より見た富士山である。日本の代表的な風景、まさに絶景である。富士を描いた絵に良い絵は無いと言われるが、この中沢弘光の作品はどうであろうか？

中沢弘光は幼い頃、両親を亡くし祖母の手で育てられた。信仰心の篤い彼女の影響があったのである。初期の彼の絵は、宗教的な題材を扱った作品が多い。東京美術学校では、黒田清輝につき外光派風の画風を身に付ける。白馬会では画壇の中堅画家として習得した画風を遺憾なく発揮することになる。その後、白馬会が発展的に解散され、光風会を創立する。この絵は三年後、中沢弘光四一歳の時の作品である。逆さ富士を描いたこの絵は、富士山と山中湖が鮮やかな青色で描かれていて、この時期の絵の特徴が良く表現されているように思う。この絵が描かれてからもうすでに一〇〇年近くの時間が過ぎ去ろうとしているが、今見ても少しも古臭くない。絵が生き生きとして見えるのは、私一人のことであろうか？ 私はこのような画家が、大自然から学んだ絵が好きである。

佐藤裕幸（東京都品川区）

中沢弘光 《富士山》

油彩・キャンバス 41.0 × 53.0cm 1915年



中沢弘光(なかがわ・ひろみつ/1874-1964年)
東京生れ。1887年曾山幸彦、堀江正章に師事。東京美術学校西洋画科卒。白馬会創立に参加。文展二、三等賞。1912年光風会創立会員。22年渡欧。24年白日会創立会員。37年帝国芸術院会員。57年文化功勞者。64年没。90歳。

■二世五姓田芳柳《新羅征伐の吉凶を卜す》

宮廷画家の絵がマクリ状態で茶道具店で格安に！

絵画（特に洋画）コレクターの多くは、「美術館」には足は向くが「博物館」（たとえ歴史画であっても）には、やや足が遠いのではないだろうか。また全く別なことだが、「二世」と聞くと、「何だ（二世）か」とやや軽んずる風潮があるのではないだろうか。実は何を隠そう、かく言う私自身がそのいずれにも当てはまることであった。

更に宮廷画家と聞くとこれまた遠い存在であった。

話は変わるが、近年相次いで、次の展覧会が開催された。

1 「二世五姓田芳柳と近代洋画の系譜」（二〇〇六年） 明治神宮（岡部昌幸氏監修）

2 「五姓田のすべて——近代洋画への架け橋」（二〇〇八年） 神奈川県立歴史博物館および

岡山県立美術館

ところで、毎月、販売カタログを送って来るJ美術、そこは茶道具中心で関心が無かったが、その末尾にこれが載っているではないか。遠路をいとわず訪問。一目見て、即、購入。保存状態も大変良い絵であった。

二世五姓田芳柳は、宮内省からの制作依頼を受け、天皇の事蹟画を数多く制作したとされ、これはその関連の絵か。

また小生の収集のテーマである「明治、大正期の絵画」、更には「日本の水彩画のあけぼの」にもつながりがありそうなので今後が楽しみである。

松尾陽作（千葉県我孫子市）

二世 五姓田芳柳《新羅征伐の吉凶を卜す》

水彩・絹 28.0 × 38.0cm 1910年頃



二世 五姓田芳柳(にせいごせだほうりゅう/1864-1943年)
茨城県生れ。五姓田義松に師事。ワーグマンに師事。1880年工部美術学校でサン・ジョバンニに師事。内国勸業博覧会に出品。89年明治美術会の創立に参加。1902年巴会会員。10年渡欧。東京で没。78歳。

渡辺與平 《静物》

二二歳の若さで夭折。……その貴重な絵を競り落とす。

渡辺與平（旧姓・宮崎與平）はその短命さ故に、正当な評価を与えられることなく、忘れ去られようとしている。

そして現在、彼の名は、洋画家としては知られておらず、わずかにコマ絵（挿し絵）画家として、知る人ぞ知るといふ程度で、残っているのみである。

彼は郷里、長崎を出て京都市立美術工芸学校に学び、その後上京。文展にも入選をはたす。

一方、一九〇七年頃（一八歳）から少しずつ体調を崩し、一九一二年、結核で亡くなっていた。したがって、彼の制作期間は非常に短い。

そうは言っても、亡くなった年の遺作展には九八点が集まったとされている。他方、近年（二〇〇八年）、長崎県美術館で開催された「渡辺与平展」、担当の学芸員氏が手をつくして集めても、はるかに少ない点数しか集まらなかったのも、まだ埋もれている作品は多いと思われる。

ところで、この作品は近年さるオークションに出品されたもの。前記のように殆ど忘れ去られており、競争者は少ないと思っただら、あに図らんや、オークション本番では、いきなり一〇本近いパドル（番号札）が上り小生もびっくり！ 値も上がったが、競合者を振り落とすし、無事落札に成功！

この絵の裏面には、「明治四五年（亡くなった年）渡辺與平」の紙片が貼ってあった。

松尾陽作（千葉県我孫子市）

渡辺與平 《静物》

油彩・板 24.3 × 33.4cm 1912年



渡辺與平（わたなべ・よへい／1889-1912年）
長崎県生れ。京都市立美術工芸学校卒。1904年室町画塾で鹿子木孟郎に師事。06年中村不折に学ぶ。08年文展に初入選。10年文展で三等賞。挿絵画、日本画も描く。『ヨヘイ画集』を出版。12年没。22歳。

■ 後藤工志 《甲州風景》

入手し難い夭折ようせつの水彩画家の作品が通販カタログに！

後藤工志は三六歳の若さで亡くなったせいか、作品の数が少なく、かつ、世の中にあまり知られていない。

日本の各地で時折、開催される「日本の水彩画展」と題する展覧会には、後藤工志は必ずと言ってよいほど取上げられている。しかし出品（展示）される作品としては、《相州真鶴附近風景》（東京国立近代美術館所蔵）が、これまた必ずと言って良いほどに紹介されている。これは取りもなおさず後藤の作品数、美術館所蔵数が少ないせいと思われる。

私も今まで画廊やオークションでお目にかかったことは無かった。

この絵は、月一回程度、通信販売のカタログを出している、神田神保町のH堂のカタログに、ひょっこり載っていたもので、かなりの価格であったが、またとない機会と考え、思い切って購入したものだ。

『近代の美術58 日本の水彩画』（匠秀夫編集、至文堂）には後藤工志の作品としては、『小雨降る山村』（一九二三年、東京国立近代美術館所蔵）が紹介されている。図柄はだいぶ違うが雰囲気はそっくり！

このような良い作品が入手出来たことは、大変幸せ！

松尾陽作（千葉県我孫子市）

後藤工志 《甲州風景》

水彩・紙 43.0 × 58.6cm 1923年頃



後藤工志（ごとう・こうし／1893-1929年）
東京生れ。日本水彩画会研究所で大下藤次郎らに学ぶ。太平洋画会展、文展に入選。1913年日本水彩画会の結成に参加。光風会に出品、今村奨励賞、光風会会員。帝展で特選。29年没。36歳。

丸山晚霞 《ヒマラヤと石楠花》

代表作 《ヒマラヤと石楠花》が「作者不詳」で！

そう遠い昔ではない。今から数年前、オークションの下見会で出会ったもの！

当日は、出品点数が多く、下見会はいつもの会場に並べ切れなくて、同じビルの別の階の貸会議室を借りて、そちらに、インテリア版画と一緒に並べられていたもの。その中に「作者不詳」として何点かのセットの中にあるのを偶然発見！翌日のオークションで無事超安価で競り落とすことに成功。

ところで、『アサヒグラフ』の水彩画特集号の中に同じ構図（右と左の違いはあるが）の絵が東京国立近代美術館所蔵として載っているではないか。おまけに、これが表紙にまでなっている。その上、寸法も全く同じサイズ。

晚霞の水彩画は初期の細密な描写もなかなか良いが、この絵のような雄大で臨場感あふれた描写も素晴らしいと思う。

先年、晚霞の出身地、長野県東御市立丸山晚霞記念館で開催された「丸山晚霞水彩画秀作展」に出品を要請され、現在は同館に寄託されている。

教訓……「作者不詳」こそ名作を超安値で入手出来る金鉱脈！

松尾陽作（千葉県我孫子市）

丸山晚霞 《ヒマラヤと石楠花》
水彩・紙 32.8 × 51.0cm 1924年



『アサヒグラフ別冊 美術特集 日本編57 近代日本の水彩画』表紙（朝日新聞社刊）
丸山晚霞 《ヒマラヤと石楠花》（部分）1924年

丸山晚霞（まるやま・ばんか／1867-1942年）
長野県生れ。彰技堂に学ぶ。1890年内国勲業博覧会に出品。98年明治美術会記念展に出品。99～1901年渡米欧。01年太平洋画会創立会員。07年日本水彩画研究所を設立。13年日本水彩画会創立評議員。長崎で没。74歳。